

News Letter

WANTED!



Odontomachus monticola Emery, 1892

今回は、なぜか私にとって縁のある一風変わったアリのお話しを書こうかと思ひます。

そのアリは、アギトアリ *Odontomachus monticola* Emery, 1892と言ひまして、環境省レッドリストでは「薩摩半島のアギトアリ」として、絶滅のおそれのある地域個体群に指定されています。

「アギト」とは牙や顎の意味で、属名の「*Odontomachus*」には

「歯で闘う(アリ)」という意味があるのですが、このことからわかるようにアギトアリは非常に大きな大顎を持っています(標題写真参照)。この大顎は180度開くことができ、この大顎で土壤中に生息する微小生物を捕獲すると言われています。大顎を閉じて餌を捕獲するのですが、そのスピードは生物界で最も早いという研究結果があるようです。また、危険を察知したときは大顎をパチンと勢いよく閉じ、その反動を利用して後ろにジャンプし外敵から逃げるすることができます。その怪獣のような頭部には神経と筋肉の塊が入っているのでしょうか。

さて、このアギトアリですが、現在のところ、日本での分布は非常に限られており、鹿児島県の薩摩半島(大浦町、坊津町、穎娃町、知覧町、開聞町、鹿児島市の平川、烏帽子岳、野頭、七ツ島)、屋久島、種子島、口之永良部島が知られています。また、非常に近縁なオキナワアギトアリは沖永良部島と沖縄本島に分布しています。これらの分布地のうち坊津町、知覧

町、沖永良部島の3箇所は私が発見しており、そう言う意味で縁の深いアリなのです。アギトアリが平地から山中まで見られる屋久島や種子島は、薩摩半島ではなく大隅半島に隣接しているのですが、今のところなぜか大隅半島からは分布記録の報告がありません。

また、約6,000年前に鬼界カルデラの大噴火により屋久島や種子島、口之永良部島を含む大隅諸島は壊滅的な被害を受けたことが知られており、アギトアリが火砕流の被害を乗り越えたのか、その後この地域に入ってきたのか、分布に関して謎が残っています。

鹿児島大学大学院在学中に、同期の大城戸博文さんがこのアリの研究をし

ており、アギトアリの不思議な分布状況に関してよく議論していただきました。そこで私は、とある仮説を立ててみました。現在生息が確認されている場所には、その昔貿易や密貿易が行われていた港が近くにある例がいくつか見られました。そして、アギトアリにはこの紙面では書くことのはばかられる、とある利用価値があることがわかったことから、昔は

貿易商がアギトアリをアジア一帯で売っていたのではないかとという仮説です。実際は分布拡大のスピードが非常に遅いだけだとは思いますが、非常にユニークな仮説だと自負しています。

ところが最近、長崎県でも本種が確認されているという未確認情報が飛び込んできており、「怪しい貿易商仮説」が現実味(?)をおびてきました。写真1のような場所の側溝を探すと写真2のようにノソノソと歩き回る体長1cmほどのアギトアリを見つけることが出来るかもしれません。みなさんもアギトアリを探してみませんか?

(九州支社自然環境研究室 祝 輝男)

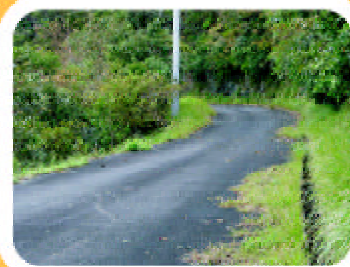


写真1



写真2

目次

エッセイ	WANTED!アギトアリ	1	エッセイ	福島県吾妻連峰の高山植物たち	6
業務紹介	外来種をめぐる現状	2	ある日のフィールドノートから	ハイタカの痕跡を拾う	8
マンガ	調査員物語	5			